

後腹膜神経鞘腫の1例

日本医科大学泌尿器科学教室（主任：秋元成太教授）

佐藤 三洋, 坪井 成美, 長谷川 潤

木村 剛, 吉田 和弘, 秋元 成太

A CASE OF RETROPERITONEAL SCHWANNOMA

Mitsuhiro SATOH, Narumi TSUBOI, Jun HASEGAWA,

Go KIMURA, Kazuhiro YOSHIDA and Masao AKIMOTO

From the Department of Urology, Nippon Medical School

A 39-year-old man, who had been pointed out to have a lower abdominal mass, was admitted to our hospital. Physical examination revealed a child-head-sized mass with smooth surface in the middle part of the lower abdomen. Computerized tomographic scan showed the non-cystic mass located in the retroperitoneal space from the level of L₅ to S₅. An open biopsy was performed and pathological diagnosis was benign schwannoma (Antoni A and B type). Radical operation could not be performed because of his refusal. In addition to this case, 40 cases of retroperitoneal schwannoma reported in Japan are reviewed and discussed.

(Acta Urol. Jpn. 35: 839-842, 1989)

Key words: Benign schwannoma, Retroperitoneal space

緒 言

神経鞘腫はその多くが頭頸部、四肢に発生し後腹膜腫瘍として発見されるものは神経鞘腫全体からすると比較的稀である。最近われわれは後腹膜神経鞘腫を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者：39歳，男性，会社員

主訴：下腹部腫瘍の精査

既往歴：13歳から16歳，肝炎，腎炎，17歳，椎間板ヘルニア。

家族歴：兄が脳腫瘍にて死亡。

現病歴：1987年8月7日健診にて下腹部腫瘍指摘。同年8月13日当科受診し精査目的にて8月24日入院。なお排尿，排便障害なく他の自覚症状もなし。

現症：栄養体格中等度，血圧118/70，脈拍66整。腹部理学的所見異常なし。外陰部，陰囊内容，肛門に異常なし。肝，脾，両腎とも触知せず。皮膚に異常見られず。下腹部中央はやや膨隆し小児頭大，球形，表面平滑，弾性軟の腫瘍を触知。腫瘍と皮膚との癒着はないが可動性を欠き，血管雑音を聴取せず。

入院時検査所見：コリンエステラーゼ，総ビリルビ

ン，総蛋白が若干異常を示したのみであった。

X線学的検査所見：IVPにて骨盤内に淡い腫瘍陰影が認められ，その腫瘍によると考えられる両側下部尿管の側方への偏位が見られ，膀胱は左に圧排されていた（Fig. 1）。注腸造影では直腸は腫瘍により右に圧排されS状結腸は上方に偏位していた。腸管の粘膜面は正常と考えられ，腫瘍は腸管より発生したものとは考えられなかった。CT上腫瘍は後腹膜腔に径13cmで第5仙椎レベルに至り，前方は境界明瞭で膀胱を圧排していた。後方は仙骨を破壊しており仙骨内にも腫瘍があった。腫瘍の内部は単純CTでは均一であった（Fig. 2）が，造影するとエンハンスされる部分を不均一に認めた（Fig. 3）。骨盤動脈造影を施行したところ左右の内外腸骨動脈は腫瘍により側方に圧排され偏位し，正中仙骨動脈の蛇行，偏位が著しかった。

以上より後腹膜腫瘍の診断にて同年9月16日試験切除術を施行した。

手術所見：下腹部正中切開にて経腹膜的に後腹膜腔に達した。腫瘍は表面平滑で線維性被膜に包まれ，被膜を除去すると内容は淡黄色ゼリー状であった。

病理組織学的所見：ヘマトキシリン-エオジン，アルシアンブルー-パース，マッソンなどの通常染色およびS-100蛋白に対する免疫組織染色を行った。Fig. 4

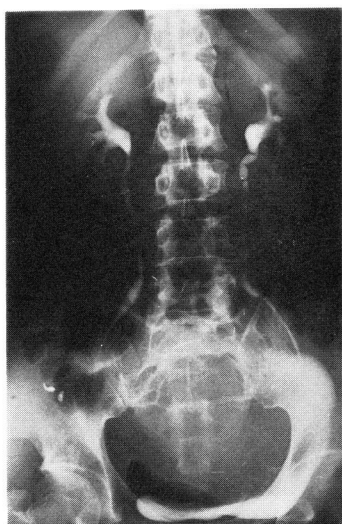


Fig. 1. IVP shows lateral deviation of bilateral ureters and compression of bladder to the left.

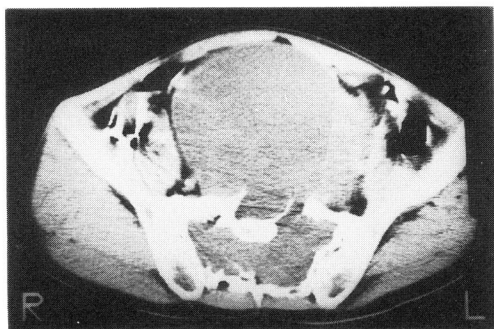


Fig. 2. CT scan shows a tumor in the retro-peritoneal space.

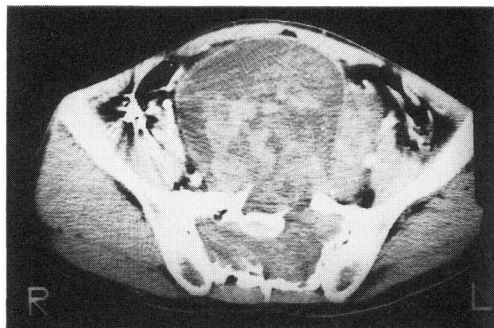


Fig. 3. Enhanced CT scan shows a heterogeneously enhanced mass.

はヘマトキシリン-エオジン染色であるが、腫瘍実質は境界明瞭な線維性被膜に被われアルシアンブルー陰性の浮腫状の基質に S-100 蛋白陽性の紡錘型から円



Fig. 4. Histological examination of the tumor shows benign schwannoma.

形の細胞が散在する Antoni B type の領域がほとんどを占めていた。一部に palisading pattern を伴う細胞密度の高い Antoni A type の領域も観察された。いずれの領域も細胞異型はほとんどなく、核分裂像も認められなかったため、良性の神経鞘腫と診断された。

本症例では良性腫瘍で無症状であること、仙骨除去による後遺症の発現の可能性、患者が手術を希望しなかったためなどにより、全摘出術を施行せず現在経過観察中である。

考 察

良性神経鞘腫の好発部位は Das Gupta ら¹⁾によると頭頸部が44.9%と最も多く、後腹膜原発は0.7%である。一方、神経鞘腫が良性後腹膜腫瘍に占める割合は天野ら²⁾によると6.9%であり、比較的稀な疾患である。好発年齢は30歳から60歳であり男性が女性よりやや多い。臨床症状は初期無症状のことが多く、腫瘍の増大に伴い腫瘤の触知、腹痛、腰痛、排尿障害、食欲不振など³⁾がある。本邦における良性後腹膜神経鞘腫症例を堀江ら⁴⁾が42例それ以後奥村ら⁵⁾が52例集計しており、それら以後自験例を含めた1983年から1987年までのわれわれが検索しえた計41例を Table 1 に示す。年代別にみると男女とも50歳代にピークを持ち、主として30歳代から60歳代に分布していた。男女比は1:1であった。臨床症状は自覚症状がないものが37%もあり、他疾患の精査中などに偶然腹部腫瘤を指摘されたものが多かった。また神経鞘腫に特有な症状はみられなかった。診断に関しては CT やエコーが腫瘍の範囲、浸潤の有無などの決定に有用であると思われる。また、本症例ではみられなかったが、Takatera ら⁶⁾は本症の63%に嚢胞性変化が認められたと報告している。最近では MRI にて腫瘍の性状がよくとらえられた^{6,7)}との報告もある。治療は一般的に被膜を含

Table 1. Summary of benign schwannoma reported in the Japanese literature after reports by Horie and Okumura

報告者	年齢	性別	自覚症状	報告年	報告誌(巻)
岩佐 ^他	38	女	臍部不快感	1983	日泌尿会誌(75)
具 ^他	50	女	腹部疝痛、嘔気、嘔吐	1983	日臨外医学会誌(44)
森 ^他	59	男	右大腿痛、知覚異常、左下肢麻痺	1983	日泌尿会誌(75)
西村 ^他	60	女	無	1983	日泌尿会誌(75)
岩切 ^他	13	女	感冒様症状、腹痛	1983	小児外科(15)
川田 ^他	52	女	右腰部痛、右大腿部痛、下腹部腫瘍	1983	日泌尿会誌(75)
柳井 ^他	38	女	臍部圧迫感	1983	日医放線会誌(44)
浅井 ^他	33	女	下腹部膨満感	1984	産と婦(51)
藤島 ^他	44	男	下腹部痛	1984	日泌尿会誌(76)
庄田 ^他	40	男	無	1984	日泌尿会誌(76)
多田 ^他	59	女	左側腹部腫瘍、疼痛	1984	日泌尿会誌(76)
斉藤 ^他	34	男	無	1984	日泌尿会誌(76)
高寺 ^他	34	男	腹部鈍痛、下肢冷感	1984	日泌尿会誌(76)
金 ^他	63	男	無	1984	日泌尿会誌(76)
橋本 ^他	63	女	排尿痛	1985	日泌尿会誌(76)
宮城 ^他	64	男	無	1985	日泌尿会誌(76)
渡辺 ^他	62	女	胃部もたれ感	1985	日泌尿会誌(78)
渡辺 ^他	54	女	左臀部痛	1985	日泌尿会誌(78)
垣本 ^他	29	男	全身倦怠感	1985	西日泌尿(48)
内山 ^他	47	女	無	1985	日泌尿会誌(78)
上池 ^他	57	男	腹部膨満感	1985	日医放線会誌(45)
永田 ^他	59	女	無	1985	日医放線会誌(45)
塩山 ^他	35	女	左季肋部痛	1985	日医放線会誌(45)
本出 ^他	47	女	腰痛、殿部痛	1986	日消病会誌(83)
植村 ^他	52	男	無	1986	日泌尿会誌(78)
竹沢 ^他	61	男	悪心、嘔吐、下痢、下腹部腫瘍	1986	日泌尿会誌(78)
古川 ^他	43	男	右側腹部腫瘍	1986	日泌尿会誌(78)
固武 ^他	53	男	腹部腫瘍	1986	外科(48)
武居 ^他	46	女	右腰痛	1986	西日泌尿(48)
川原 ^他	58	男	無	1986	日泌尿会誌(78)
湯城 ^他	55	女	無	1986	日臨外医学会誌(48)
栄浪 ^他	52	男	無	1986	日消病会誌(84)
土田 ^他	52	男	左下腹部痛	1986	日臨外医学会誌(48)
柿崎 ^他	78	男	右側腹部痛	1986	日泌尿会誌(78)
菅原 ^他	63	女	全身倦怠感、頭重感	1986	日消病会誌(84)
江口 ^他	63	男	尿失禁	1986	日泌尿会誌(78)
森本 ^他	73	男	排尿困難	1987	臨泌(41)
森本 ^他	50	女	無	1987	臨泌(41)
高山 ^他	50	女	無	1987	臨泌(41)
長谷川 ^他	36	女	無	1987	産婦の実際(36)
自験例	39	男	無	1988	

めた広範囲摘除術が行われるが、Goldman^ら³⁾は悪性神経鞘腫に cyclophosphamide, vincristine, adriamycin, imidazole carboxamide を与えて成果を挙げている。放射線療法は感受性が低く、治療に用いられないようである。

結 語

自覚症状がなく偶然に発見された39歳、男性の後腹膜神経鞘腫の1例を経験したので、本邦報告例の集計とともに、若干の文献的考察を加え報告した。

本論文の要旨は第453回東京地方会において発表した。

文 献

- 1) Das Gupta TK, Brasfield RD, Strong EW and Hajdu SI: Benign solitary schwannomas (neurilemmomas). *Cancer* **24**:355-366, 1969
- 2) 天野正道, 田中啓幹, 大森弘之, 佐藤義信: 後腹膜類皮嚢腫の1例. *西日泌尿* **37**: 734-741, 1975
- 3) 奥村 哲, 吉田和弘, 西村泰司, 平澤精一, 金森幸男, 秋本成太: 後腹膜悪性神経鞘腫の1例. *泌尿紀要* **30**: 235-247, 1984
- 4) 堀江正宣, 栗山 学, 坂 義人, 河田幸道: 腹膜後神経鞘腫. *日泌尿会誌* **67**: 473-480, 1976
- 5) Takatera H, Takiuchi H, Namiki M, Takahashi M, Ohnishi S and Sonoda T: Retroperitoneal schwannoma. *Urology* **28**: 529-531, 1986
- 6) 塩山端和, 佐藤守男, 野村尚三, 川端 衛, 白井信太郎, 前田美保, 吉川明輝, 田中佳代, 山田龍作: 血腫を伴う腹部 Schwannoma の1例. *日医放線会誌* **46**: 96, 1986
- 7) 本出 肇, 森 重人, 西川俊邦, 今村正之, 前谷俊三, 戸部隆吉, 西村一雄, 琴浦良彦: NMRにて術前診断し得た直腸後部神経鞘腫の1例. *日消病会誌* **83**: 1600, 1986
- 8) Goldman RL, Jones SE and Heusinkveld RS: Combination chemotherapy of metastatic malignant schwannoma with vincristine, adriamycin, cyclophosphamide and imidazole carboxamide. *Cancer* **39**: 1955-1958, 1977

(1988年5月31日受付)